立原啓裕が聞く！

医伝心 医療の現在・過去・未来を本音でトーク

神の領域にメスを入れる者、その至難と冥利

取材／久松皇美　撮影／杉本将章

多発したオートバイ事故が脳外科進歩の引き金に

立原　お医者さんの中でも、脳外科というのはいかにも難しそうですね。

大西　脳の詳しいメカニズムは、まだわからないことだらけです。もちろん、ここ30余年での進歩は目覚しいものがありますが。私が医大を出た1971年当時は、脳外科学の専門講座がある大学など全国でも数校。医療現場ではCTもMRIもありません。検査といえば脳波と、苦痛を伴う血管造影ぐらいで、脳内出血と脳梗塞の区別さえなかなかつかず、惨憺たるものでした。

立原　恐ろしい時代でしたね。どうしてこの分野を選ばれたのですか？

大西　未知なるものへの興味でしょうか。またその頃、オートバイに乗る人による事故も多く、しかもヘルメットの着用が義務づけられていなかったので、外傷による頭の手術が急増したんです。とにかく急いで脳外科医を養成しなければという、社会的な機運も後押ししたのですね。

立原　なるほど。生活習慣病による脳卒中のためでなく、頭の怪我が増えたことから開頭手術の技術が進んだと。

大西　当時、脳神経外科の権威・菊池晴彦*先生が、スイス留学から新しい顕微鏡手術の技術を携えて帰ってこられた。その手術を見せてもらい、個々の構造を確認しながら的確に進める手術方法、そして顕微鏡で覗いた脳の中の万華鏡のような美しさに、生涯忘れられないほど感動させられましたね。「これからは顕微鏡手術の時代だ」と先生を追いかけて北野病院で弟子入りしたのが、今につながっています。

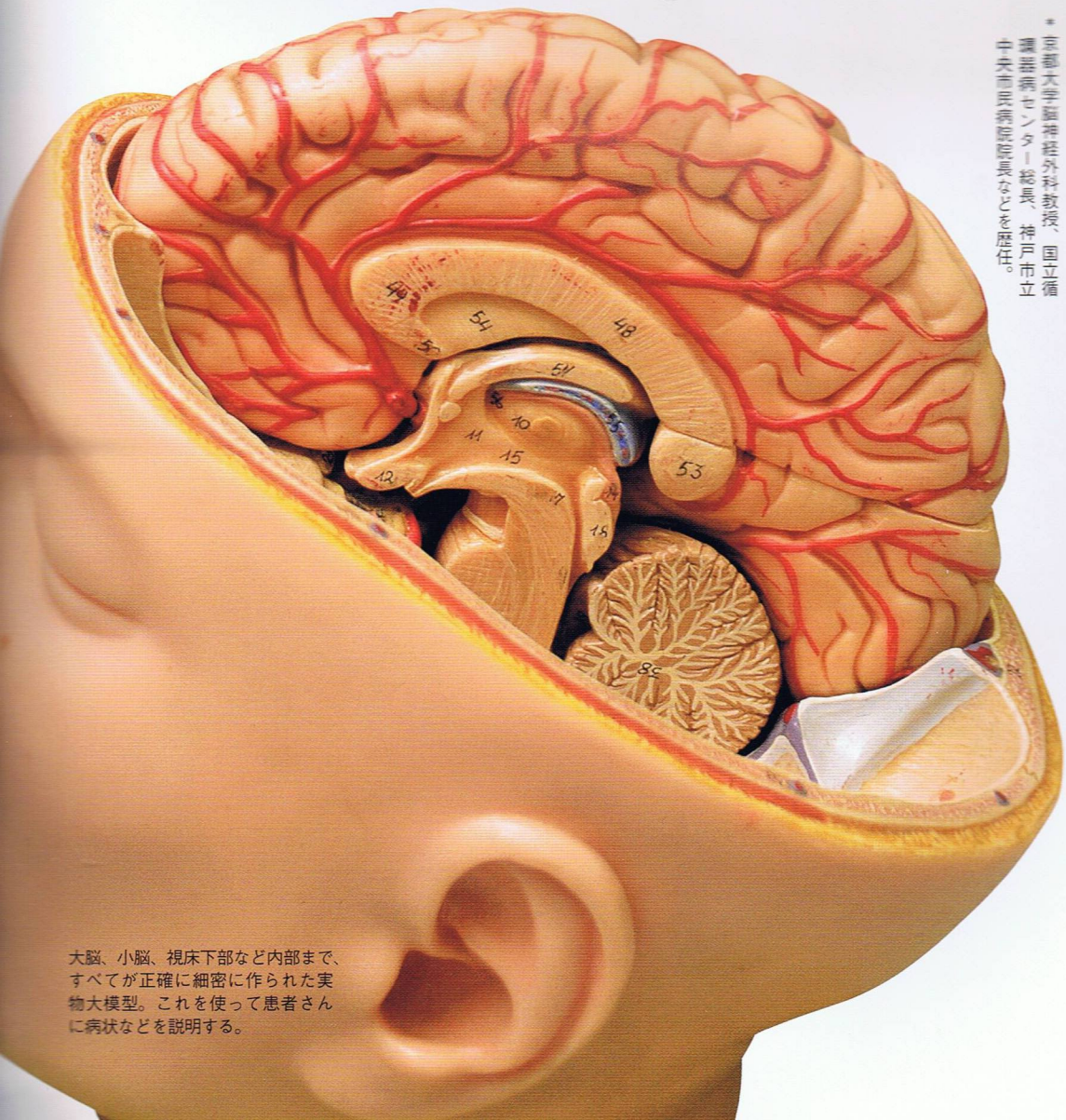
鹿児島や青森からも患者が集まるその信頼のわけ

立原　先生が当地に開院されたのが2001年。明石という地方都市にあってまだ10年も経たずに、近年の脳動脈瘤手術数などでは県下トップ、新聞や雑誌での「よい病院」ランキング上位の常連として全国的な評価を獲得しておられる。すごいことですが、この原動力は何なんですか？

大西　当然ながら、患者さんは結果を求めます。やはり治療成績。そのレベルを維持できたのは、顕微鏡手術をいち早く取り入れたこともありますし、先ほどお話した菊池先生ほか立派な先輩の方々のおかげで人のつながりが広がったこと、マンパワーに恵まれたことなどによるでしょうか。

立原　医師不足などが深刻な問題にな

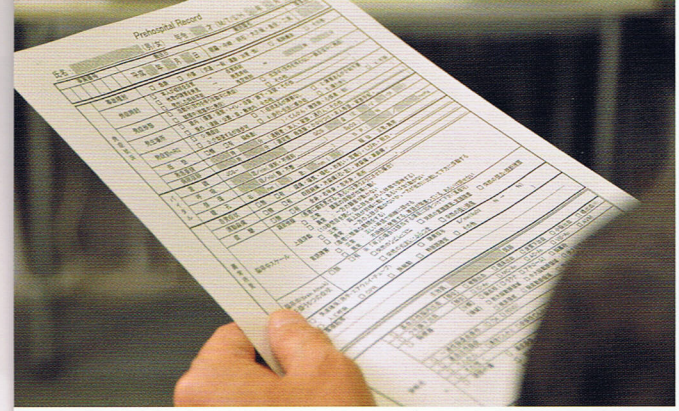
＊京都大学脳神経外科教授、国立循環器病センター総長、神戸市立中央市民病院院長などを歴任。



大脳、小脳、視床下部など内部まで、すべてが正確に細密に作られた実物大模型。これを使って患者さんに病状などを説明する。

たちはらけいすけ
立原啓裕　*Profile*

1954年1月12日大阪生まれ。奈良育ち。大阪芸術大学卒業後、劇団四季に入団。4年半の在籍後、帰阪し、放送タレントとして活躍。代表番組に『立原啓裕の昼どきワイド』『探偵！ナイトスクープ』『ムイミダス』等、多数。また、日本医学ジャーナリスト協会会員としての著書『立原啓裕の自律神経安定法』は、3万部にせまるベストセラーとなり、講演活動にも多忙。さらに、大阪芸術大学グループ客員教授という顔ももつ。



大西脳神経外科病院が考案した「プレホスピタルレコード」は、わが国初の試み。救急搬送する際の記録票に自覚症状や脳卒中スケールなどの項目を加えることで、脳卒中か、心臓疾患か、一般の病気か、などを判断して適切な専門病院へと運ぶことができる。

〈今月のドクター〉
大西英之先生
医療法人 社団英明会 大西脳神経外科病院院長
奈良県立医科大学卒業後、北野病院脳神経外科、島根県立中央病院脳神経外科医長、奈良県立医科大学脳神経外科講師、大阪警察病院脳神経外科部長などを経て平成12年大西脳神経外科病院院長。医学博士。脳神経外科専門医、脳卒中専門医。

毎朝7時30分から、パソコンの大モニターに向かってすべての入院患者のCT、MRIや血管造影画像などに目を通し、スタッフと確認、ディスカッションを行う大西先生。

っている昨今ですからね。

大西　うちは24時間、365日の救急体制を敷いていますが、当直医だけでも7人以上います。この規模では大体3人がやっとという現状ですから、ありがたい数字です。優秀な看護師たちもヘッドハントしてきました。人が一番ですから。私が生まれ育った明石には脳外科の専門医が少なかったこともあり、故郷で自分の理想の医療に近づきたい、そしてそれまでに得たものを次の世代につなぎたい、という気持ちが強くありました。

立原　先生のその意欲、実行力を支えてきたのは、脳外科医としての誇りでしょうか？

大西　医者として最高の見返りは、お金より何より、患者さんが笑顔で退院されることです。脳外科というのは、患者さんが重傷でこん睡状態で運ばれてくることが多いでしょ。それが治療に従って、目をパチパチするようになり、ウ～ウ～と声を発し、看護師の呼びかけに応え、やがて言葉をしゃべり、食事をし、リハビリを経て元気になる。こういった劇的な回復の過程に関わる喜びはなんともいえないものです。半死から生へのドラマを患者と共有するのは、脳外科医にしかわからない苦労、そして幸せ。この回復のドラマというのは、実にやりがいを感じさせるんですよ。

機械を超える人間の技こそ脳外科医の「アート」

立原　先生の治療ポリシーとして「サイエンス（科学）、アート（芸術）、ヒューマニティ（人間愛）」の三要素が挙げられていますが、このアートとはどういうことでしょう。

大西　例えば、我々の顕微鏡手術では、1㎜の血管を10～12針かけて縫うようなことをします。最初は手が震えますが、上達すると機械より手の方がはるかにうまい。ロボット技術ももちろん必要ですが、デリケートで複雑な脳の手術では、職人さんの技と同じで、手でないと上手にいかない部分がある。我々にとってのアートとは、手術技術などを芸術の域にまで高めることをいっています。

立原　科学技術がいくら進んでも、特に脳外科などでは、人の技や感性というプラスアルファがどうしても必要なんですね。では最期に、先生が今後目指されていることを。

大西　いつも考えていることは「当然助けられる人を助けてあげたい」。でも、救急崩壊などと言われるように、大したことのない人が貴重な救急車をむやみに呼んだり、その一方、近所の目を気にして救急車を呼ばずに手遅れになるような場合もある。我々は地域を支える病院の一つとして、住民の皆さんと一緒に救急医療を改善するような活動をしたいですね。救急隊との連携を高める「プレホスピタルレコード」を考案したのもその一例。医療というのはみんなの共有財産ですから、診る側、診られる側が互いに意識を高めていくことがますます求められるのではないでしょうか。

立原　なるほど。先生方もそこまで日夜頑張ってられるんですから、患者となる僕たちも、もっとお医者さんのかかり方を学んで賢くならないとダメですね。

インタビューを終えて

タイトルにある「神の領域にメスを入れる」というフレーズ。先生は医学者ゆえこんな事は口にしないかもしれないが、僕をはじめ「この世に神が存在するとしたら、間違いなく神は〝人間の心＝脳〟という宇宙の中に存在する」という想念を持っている人も多いだろう。

医療法人 社団英明会 大西脳神経外科病院
住明石市大久保町江井島1661－1☎078－938－1238
東播磨の中心部に建つ脳神経外科の専門病院で、手術件数は年間600件を超える。SCU（脳卒中ケアユニット）、ICU（脳卒中集中治療室）など10床を合わせて82床の明石市救急基幹病院であり「脳ドック」なども行っている。